

## 領域「表現」に関する調査研究 — 音楽的表現における保育者の意識と実態について —

横 井 志 保

### はじめに

表現の講習会や研修会は常に大勢の参加者で溢れ、少しでも明日の保育の参考にしたいという熱心な保育者が大勢集まる。日々の保育の中で保育者達はいったい何に困難を感じ、こういった講習会や研修会に集まってくるのだろうか。2010年に行った保育士を対象とした調査<sup>1)</sup>からは、子どもの表現への支援の難しさとして、①保育内容や展開方法②子ども理解③子ども間の差④保育士自身の技能の4つが大別され明らかとなった。しかし、2010年の調査では保育士を対象に領域「表現」について尋ね、音楽的な表現だけに言及したものではない。そこで、本研究では、幼稚園教諭も含めた保育者 189 名に、音楽的な表現活動について尋ね、その内容や環境の構成、活動における指導や援助の難しさを明らかにすることを目的とする。

### 領域「表現（音楽にかかわる表現）」に関する調査

#### 1. 調査の概要

##### (1) 調査目的

保育者は日々、子どもと共に楽しめる表現活動をしようと様々な実践をしているが、それはどのような内容のものであるのか。また、その中で指導や援助における難しさをどこに感じているのか。そして、その改善策はどこにあると考えているのか、保育者の意識と活動の実態を探るのが本調査の目的である。

##### (2) 調査対象

県下の私立幼稚園・保育所、公立幼稚園・保育所の教諭・保育士合わせて合計 189 名を対象とした。

##### (3) 実施期間

2011年8月5日～8月26日に実施。

##### (4) 調査方法

質問紙による調査で、質問紙は研修会終了後配付し、その場で回収した。回収率・有効回答数共に 100%であった。

##### (5) 調査内容

###### ①フェイスシート

###### ②表現にかかわる環境の構成について

- a. 環境構成した具体的なモノ
- b. その準備した理由
- c. 配慮した点
- d. モノにかかわる子どもたちの様子

###### ③活動の具体的な内容

###### ④指導や援助で難しいと思ったこと

###### ⑤指導や援助で難しいと思ったことの改善策

###### ⑥子どもと共にやる表現活動をする上で身に付けておくと良いと思われる力

###### ⑦表現に関する自由記述

### 2. 調査の結果と考察

#### (1) 回答者の所属について

回答者の所属については、表 1 の通りである。

表 1 回答者の所属

回答者の所属	公立	私立	計	%
保育園	148	33	181	95.8
幼稚園	0	8	8	4.2
計	148	41	189	
%	78.3	21.7		100.0

研修会参加者に調査を依頼したので、公立が 78.3%を占め、公立園は全てが保育園である。また、幼稚園は全体の 4.2%と少数となっている。

#### (2) 回答者の保育経験年数について

回答者の保育の経験年数は表 2 の通りで、5年以下の初任者が 40.2%と多くを占めている。次に 6年以上 10年以下が 27.5%と多く、次が 16

年以上 20 年以下が 14.8%と続く。

表 2 回答者の保育経験年数

保育経験年数	f	%
5 年以下	76	40.2
6～10 年	52	27.5
11～15 年	13	6.9
16～20 年	28	14.8
21～25 年	9	4.8
26～30 年	4	2.1
NA	7	3.7
計	189	100.0

(3) 回答者の担当について

回答者の担当学年は表 3 に示した通りであるが、保育園の場合、未満児は複数担任であるので、回答者の 33.9%が未満児と多くなるのはもっともなことであろう。

表 3 回答者の担当学年

学年	f	%
未満児	64	33.9
年少	34	18.0
年中	37	19.6
年長	43	22.7
その他	7	3.7
NA	4	2.1
計	189	100.0

(4) 活動の内容について

質問紙にて「表現（音楽にかかわる表現）の内容について教えてください。どのようなことをよくされますか。具体的に挙げてください。」と記述式で回答を求めた。回答が多岐にわたったため以下の表 4 の 8 つの項目に内容を分類した。また、複数回答も多く見られたため、割合は、活動内容に対する割合ではなく、回答者数に対する割合である。そのため、パーセントの合計は 100%にはなっていない。

最も回答が多かったものでは、リトミックを含んだリズム体操的な活動であり 73.5%であった。ここで、保育者は音楽に合わせて踊ったり、体操したりすることは、音楽的な表現活動であると考えていることがわかる。また、音楽は使用しないが、動物等になりきって身体を使って表現する

「身体表現」を、音楽にかかわる表現活動として 18.0%が回答していることから、数は多くないが一部の保育者は身体表現と音楽表現をあまり区別して考えていないことがわかる。

表 4 音楽にかかわる表現活動の内容

内 容	f	%
楽器を鳴らす（合奏を含む）	37	19.6
歌う	93	49.2
手遊び	43	22.8
手拍子	49	25.9
リズム体操（リトミックを含む踊り）	139	73.5
身体表現	34	18.0
その他（わらべうたを含む遊び）	22	11.6
CD鑑賞	2	1.1
無し	3	1.6

次に多いのが「歌う」活動であり、49.2%で半数以下であった。歌うことは、他の活動と比べると場所を選ばず準備もいらないため、どのクラスでもされている活動に思えるが、回答者の担当学年が未満児が 3 割を占めているためか、それほど活動の内容として挙げられなかった。

そして次に多いのが、リズムパターンを clap する「手拍子」である。これは、保育者の打つリズムの模倣や、歌いながら部分的にリズム打ちするものであるが、これも「歌う」活動同様、場所を選ばず、手遊び感覚でできる簡単な活動である。しかし、25.9%とリズムを意識して手を打つ活動はあまり多くはなかった。

続いて「手遊び」が 22.8%であるが、これは、手遊びを表現活動として意識するか、しないかが回答にかかわっていると考えられる。どの保育者も十八番の手遊びがあり、日にいくつも、また毎日手遊びをしない日がないほどに手遊びは園でされている。しかし、ここで数がそれほど挙がらなかったのは、歌を伴う遊びであるので、音楽表現と考える保育者もあるだろうが、手遊びには音楽だけでない遊びそのものの要素がいくつか含まれるので、音楽表現的な活動として回答しなかったと考えられる。

では、次に楽器を使う活動はどれだけされているかということ、19.6%と少なくなる。幼児クラスの担当者が 60%を超え、年長クラス担当者は

22.7%であるので、年長クラスであっても、楽器を使っていない可能性が示唆された。

#### (5) 表現にかかわる環境の構成について

音楽にかかわる表現活動において、使用しているモノや環境として準備しているモノについて回答を求めたところ、表5の通り、廃材を利用した音具を始め鍵盤楽器、打楽器、と数多くのモノが記述された。準備しているモノは複数回答であったため、割合(%)は回答者数に対する割合で算出している。

表5 環境として準備しているモノ

内 容	f	%
オルガン・ピアノ・キーボード シンセサイザー	71	37.6
鍵盤ハーモニカ	24	12.7
木琴・鉄琴	12	6.3
大・中・小太鼓・竹太鼓・和太鼓	25	13.2
ウッドブロック	12	6.3
カスタネット	60	31.7
シンバル	8	4.2
鈴	47	24.9
タンブリン	57	30.2
トライアングル	13	6.9
トーンチャイム・ハンドベル	8	4.2
リズムスティック	6	3.2
カセットテープ・CDデッキ	105	55.6
手作り(マラカス・シェイカー等)	35	18.5
廃材(空き箱・ペットボトル・缶等)	25	13.2
マイク	10	5.3
手具(ポンポン・リボン等)	23	12.2
舞台	4	2.1
楽譜(絵音符等)	5	2.6
歌う箇所がある絵本パネルシアター	2	1.1
その他(笛・アゴゴ・ギター)	10	5.3

ここで、最も多く準備されているモノをみると、55.6%とカセットテープやCDを再生するデッキといった音源である。保育者の大半が保育室に子どもが好きな時に使用できる、カセットデッキやCDデッキを準備している。また、直接音が出るモノではないが、子どもが音楽を流しながら踊ったり、楽器演奏を他児に聴かせるための環境の1つとしてマイク、手具、舞台が準備されてい

る。年長児等は、自分の踊りや演奏を他児に見せたいという思いが強く、また年中、年少児では発表会の後、年長児に憧れてその真似をするなどする姿があるので、音楽を奏する環境として、これらが記述されていることから、保育者が音楽表現する環境を大切に考え、準備していることがわかる。

次に多いのが37.6%のオルガン・ピアノ等の鍵盤楽器であるが、これらは、子どもが好きに使用できるように配されているものと、保育者が歌などの伴奏に使用しているものとを区別していない。そうであるが、多くの保育者は、使用していないことがわかる。

次はカスタネット31.7%、タンブリン30.2%、鈴24.9%と続くが、これらは手軽に音を出す事ができ、若い子どもにも扱いが易しい。また、何より園に数が多くそろえられており、準備するにも運びやすく多くの保育者が環境として準備している。

他に手作りの音具を作ったり、廃材を利用して音具として使用している保育者が30%以上いる。身近なモノから出る音に意識を向けることで、音楽がより身近なものとなるようにしていることがうかがえる。

#### (6) 指導や援助で難しいと思ったこと

活動において、指導や援助で難しいと思ったことがあったかどうか尋ね、その内容について記述してもらった。記述の内容を分類した結果が表6であるが、回答の中には複数、記述しているものもあったので、それぞれの項目に分けた。割合(%)は回答者数に対する割合で算出した。

保育者の80%以上が指導や援助で難しいと思ったことがあると回答している。その内容を見てみると、大きく3つに分けられる。1つ目に子どもの問題について。2つ目に保育者自身の指導力や音楽能力の問題について。3つ目に直接音楽にかかわる表現の指導の方法について。以上3つである。

中でも15.9%の保育者が指導の仕方や子どもへの上手な伝え方について最も難しいと思っていることがわかる。また、やりたがらない子、興味を示さない子への援助にも13.8%が難しいと思っている。また、保育者自身の音楽能力やピアノ演

奏技術の低さを難しいと思ったこととして挙げている保育者も12.2%いた。

表6 指導や援助で難しいと思ったことの内容

内 容	f	%
興味を持たない子への指導や援助	26	13.8
子どもの理解の違い	18	9.5
できない子どもへの指導や援助	17	9.0
ピアノを弾きながらの指導 及び自身の技術	23	12.2
歌の指導	12	6.3
導入の仕方	3	1.6
指導の仕方や子どもへの伝え方	30	15.9
活動のやり方自体がわからない	15	7.9
発表の練習・活動の発展のさせ方	6	3.2
合奏のアレンジの仕方	3	1.6
その他	15	7.9
無し	33	17.5

(7) 指導や援助で難しいと思ったことを改善するには

前の問いに難しいと思ったことがあると回答した156人に、その改善策を尋ねた結果をまとめたものが表7である。回答が複数の内容を含む記述もあったが、それぞれ分けて8つの項目に分類した。また割合は、難しいと思ったことがあると答えた保育者に対する値である。

表7 改善するにはどうするか

内 容	f	%
保育者自身の技能を上げる努力をする	40	25.6
子どもの興味を引くような環境を整える	28	17.9
保育者自身がモデルとなる	28	17.9
計画性を持つ・毎日少しずつ	22	14.1
子どもに合わせる	16	10.3
子どもを認める・褒める	7	4.5
他の保育者に補助に入ってもらう	7	4.5
個々に遊ばせる	5	3.2
その他	14	9.0
無回答	6	3.8

多くの保育者が現状を改善するには自分自身の音楽的な技能を上げる様努力したり、研修などを受け、指導方法を学ぶ事が大切であると回答して

おり、自分自身の能力が上がれば、困難な状態から脱することができると考えているようだ。また、子どもの興味を引くような環境を整えることが子どものモチベーションとなると考えており、保育者自身が楽しんで活動する姿を見せることも同様に動機付けにつながると考えている。

意外にも、他の保育者に補助として入ってもらおうと考える保育者は少なく4.5%であった。普段の園の人員において、これ以上は求められないという思いがあるからか、少数であった。

また、計画的に活動を進めたり、毎日少しずつ行うことが必要だと考えている保育者も14.1%いた。音楽的な表現活動は、時に技能や練習を必要とする。それゆえに日々の積み重ねの重要性を感じているが上手くいっていないことが本回答から読み取ることができる。そして、「子どもに合わせる」と回答した保育者が10.3%おり、現在子どもの発達に沿った活動がなされておらず、保育者はそこを改善することが大切だと考えていることがわかる。

「その他」の中には「わからない」という回答もあり、現状の改善策が思いつかない保育者もいる。

3. まとめ

保育者を対象とした『領域「表現（音楽にかかわる表現）」に関する調査』の結果から、保育者はどのような活動をし、どこに問題を抱えているのか。調査の結果から以下のような活動における保育者の意識や実態が明らかとなった。

- ① 音楽に合わせて踊ったりして身体で表現することも音楽的な表現であると捉えている。
- ② 音楽にかかわる表現活動であっても、表現する「場」の環境を大切に整える。
- ③ 簡単に音の出る手作りの音具や廃材を利用して子どもの身近なモノで音楽をしている。
- ④ 子どもの個人差や能力の違いに指導や援助の難しさを感じている。
- ⑤ また、活動の導入や指導の方法、発展のさせ方等の具体的な方法に難しさを感じている。
- ⑥ そして、指導上の難しさを改善するには、自分自身の技能を上げることでありと考

ている。

多くの保育者は、子どもに問題があったり、組織やカリキュラムに無理があるとしても、自分の能力を上げることで、悩みは解消される、言い換えれば、もっと自分を高めなければいけないと、常に自分を責めているのではないだろうか。

本論では、音楽にかかわる表現活動について調査した結果を単純集計し、考察してきたが、今後はクロス集計等の統計処理を施し、より詳しい実態と意識の関係を明らかにすることで今後の保育実践を考える一助となり得るだろう。今後の課題としたい。

謝辞

研修や講習後にも関わらず、快く調査に協力してくださった東海市、豊田市、西尾市、他多くの保育者の皆様に心より感謝申し上げます。

#### 註および引用・参考文献

- 1) 横井志保、鈴木裕子 2010「領域「表現」における保育士の専門性 (1) —表現活動の現状と支援のあり方の調査をもとにして—」全国保育士養成協議会 第 49 回研究大会 研究発表論文集 pp.46-47

## **Research on Field "Expression"**

### **— About Consciousness and Realities on Musical Expression of Nursery School and Kindergarten Teacher —**

Yokoi, Shiho\*

日々の保育の中で保育者達は音楽的な表現活動において、いったい何に困難を感じているのか。また、どのような環境の下、どんな内容で活動をしているのか。また、問題を解決し、現状を改善させることのできることはどのようなことであると考えているのか。保育者 189 名を対象に調査を行った。その結果、保育者は①音楽に合わせて踊ったりして身体で表現することも音楽的な表現であると捉えている。②音楽にかかわる表現活動であっても、表現する「場」の環境を大切に整える。③簡単に音の出る手作りの音具や廃材を利用して子どもの身近なモノで音楽をしている。④子どもの個人差や能力の違いに指導や援助の難しさを感じている。⑤また、活動の導入や指導の方法、発展のさせ方等の具体的な方法に難しさを感じている。⑥そして、指導上の難しさを改善するには、自分自身の技能を上げることであると考えている。以上 6 つのことが明らかになった。

キーワード：調査, 表現, 音楽, 保育者の意識, 指導や援助の難しさ